

梶井基次郎

雪
後



雪

後

一

行一が大学へ残るべきか、それとも就職すべきか迷っていたとき、彼に研究を続けてゆく願いと、生活の保証と、その二つが不充分ながら叶え^{かな}られる位地を与えてくれたのは、彼の師事していた教授であった。その教授は自分の主裁している研究所の一隅に彼のための椅子を設けてくれた。そして彼は地味な研究の生活に入った。そ

れと同時に信子との結婚生活が始まった。その結婚は行
一の親や親族の意志が阻はばんでいたものだった。然し結局、
彼はそんな人びとから我儘わがままだ剛情だと言われる以外のや
り方で、物事を振舞うすべを知らなかつたのだ。

彼等は東京の郊外につつましい生活をはじめた。櫟くぬぎ

林ばやしや麦畠や街道や菜園や、地形の変化に富んだその郊
外は静かで清すがすがしかった。乳牛のいる牧場は信子の好
きなものだった。どっしりした百姓家を彼は愛した。

「あれに出喰わしたら、こう手綱を持っているだろう、
それのこちら側へ避けないと危いよ」

行一は妻に教える。春埃はるぼこりの路は、時どき調馬師に牽ひかれた馬が閑雅な歩みを運んでいた。

彼等の借りている家の大家というのは、この土地に住みついた農夫の一人だった。夫婦はこの大家から親しまれた。時どき彼等は日向ひなたや土の匂いのするような其処の子を連れて来て家で遊ばせた。彼も家の出入には、苗床が囲ってあったりする大家の前庭を近道した。

——コツコツ、コツコツ——

「なんだい、あの音は」食事の箸を止めながら、耳に注意をあつめる科しぐさで、行一は妻にめくば眺せする。クツクツと

含み笑いをしていたが、

「雀よ。パンの屑くずを屋根へ蒔まいといたんですの」

その音がし始めると、信子は仕事の手を止めて二階へ上り、拔足差足で明障子あかりしようじへ嵌はめた硝子ガラスに近づいて行つた。歩くのじやなしに、揃あえた趾あしで跳はねながら、四五匹の雀が餌えを啄ついていた。此方こちらが動きもしないのに、チラと信子に気づいたのか、ビュビュと飛んでしまった。

——信子はそんな話をした。

「もう大慌てで逃げるんですもの。しとの顔も見ないで……」

いどの顔で行一は笑った。信子はよくそういった話で
単調な生活を飾った。行一はそんな信子を、貧乏する資
格があると思った。信子は身籠みごもった。

二

青空が広く、葉は落ち尽し、鈴懸が木に褐色の実を乾
かした。冬。こがらし 凧こがらしが吹いて、人が殺された。泥棒の噂や
火事が起った。短い日に戸をたてる信子は舞いこむ木の
葉にも慍おびえるのだった。

或る朝トタン屋根に足跡が印されてあつた。

行一も水道や瓦斯ガスのない不便さに身重の妻を痛ましく思っていた矢先で、市内に家を捜し始めた。

「大家さんが交番へ行つて下さつたら、俺の管轄内に事故のあつたことがないって。何時でもそんなことを云つて、巡回しないらしいのよ」

大家の主婦に留守を頼んで信子も市中を歩いた。

三

ある日、空は早春を告げ知らせるような大雪を降らした。

朝、寢床のなかで行一は雪解の滴しずくがトタン屋根を忙しくたたたくのを聞いた。

窓の戸を繰ると、あらたかな日の光が部屋一杯に射し込んだ。まぶしい世界だ。厚く雪を被かぶった百姓家の茅屋かや根からは蒸気が濛々もうもうとあがっていた。生まれたばかりの

仔雲！ 深い青空に鮮あざやかに白く、それは美しい運動を起していた。彼はそれを見ていた。

「どっこいしよ、どっこいしよ」

お早うを云いにあがって来た信子は

「まあ、温かね」と云いながら、蒲団を手摺てすりりにかけた。と、それはすぐ日向の匂いをたて始めるのであった。

「ホーホケキヨ」

「あ、鶯かしら」

雀が二羽ひば松葉を揺すって、転ころがるように青木の蔭へかくれた。

「ホーホケキヨ」

口笛だ。小鳥を飼っている近くの散髪屋の小僧だと思
う。行一はそれに軽い好意を感じた。

「まあほんとに口笛だわ。憎らしいのね」

朝夕朗々とした声で祈^{きとう}をあげる、そして原っぱへ出
ては号令と共に体操をする、御^{みたけ}岳教会の老人が大きな
雪^{ゆき}達磨を作った。傍に立札が立ててある。

「御岳教会×××作之」と。

茅屋根の雪は鹿^{かのこま}子斑になった。立ちのぼる蒸気は毎日
弱ってゆく。

月がいいので或る晩行一は戸外を歩いた。地形がいい工合に傾斜を作っている原っぱで、スキー装束をした男が二人、月光を浴びながらかわるがわる滑走しては跳躍した。

昼間、子供達が板を尻に当てて棒で揖かじをとりながら、行列して滑る有様を信子が話していたが、その切通し坂はその傾斜の地続きになっていた。其処は滑石かっせきを塗ったように気味悪く光っていた。

バサバサと凍った雪を踏んで、月光のなかを、彼は美しい想念ひたに涵りながら歩いた。その晩行一は細君にロシ

アの短篇作家の書いた話をしてやった。――

「乗せてあげよう」

少年が少女を櫂そりに誘う。二人は汗を出して長い傾斜を牽ひいてあがった。其処から滑り降りるのだ。――櫂は段々速力を増す。首巻がハタハタはためきはじめる。風がビュビュと耳を過ぎる。

「ぼくはお前を愛している」

ふと少女はそんな囁ささやきを風のなかに聞いた。胸がドキドキした。然し速力が緩ゆるみ、風の唸うなりが消え、なだらかに櫂が止まる頃には、それが空耳だったという疑惑が

立たちこ罩める。

「どうだったい」

晴ばれとした少年の顔からは、彼女は孰いずれとも決めかねた。

「もう一度」

少女は確かめたいばかりに、また汗を流して傾斜をのぼる。——首巻がはためき出した。ビュビュ、風が唸つて過ぎた。胸がドキドキする。

「ぼくはおまえを愛している」

少女は溜ためいき息をついた。

「どうだったい」

「もう一度！　もう一度よ」と少女は悲しい声を出した。今度こそ。今度こそ。

然し何度試みても同じことだった。泣きそうになって少女は別れた。そして永遠に。

——二人は離ればなれの町に住むようになり、離ればなれに結婚した。——年老いても二人はその日の雪滑りを忘れなかった。——

それは行一が文学をやっている友人から聞いた話だった。

「まあいいわね」

「間違ってるかも知れないぜ」

大変なことが起った。或る日信子は例の切通しの坂で顛倒てんとうした。心弱さから彼女はそれを夫おつとに秘していた。産婆の診察日に彼女は顛ふるえた。然し胎児には異状はなかったらしかった。そのあとで信子は夫に事のありようを話した。行一はまだ妻の知らなかったような怒り方をした。

「どんなに叱られてもいいわ」と云って信子は泣いた。然し安心は続かなかった。信子はしばらくして寝つい

た。彼女の母が呼ばれた。医者は腎臟じんぞうの故障だと診みて帰った。

行一は不眠症になった。それが研究所での実験の一頓とん挫ひきと同時に来た。未だ若く研究に劫こうの経ない行一は、その性質にも似ず、首尾不首尾の波に支配されるのだ。夜、寝つけない頭のなかで、信子がきつと取返しがつかなくなる思いに苦しんだ。それに屈服する。それが行一にはもう取返しのつかぬことに思えた。

「バッタバッタバッタ」鼓翼の風を感じる。「コケコツコウ」

遠くに競争者が現われる。此方こっちは如何にも疲れている。あちらの方がピッチが出ている。

「……」とうとう止よしてしまった。

「コケコツコウ」

一声——二声——三声——もう鳴かない。ゴールへ入ったんだ。行一はいつか競漕レースに結びつけてそれを聞くのに慣れてしまった。

四

「あの、電車の切符を置いてって下さいな」靴の紐ひもを結び終った夫に帽子を渡しながら、信子は弱よわしい声を出した。

「今日は未だ何処へも出られないよ。此方から見ると顔がまだむくんでいる」

「でも……」

「でもじゃないよ」

「お母さん……」

「お姑かあさんには行ってもらうさ」

「だから……」

「だから切符は出すさ」

「はじめからそのつもりで云ってるんですわ」信子は窠やつれの見える顔を、意味のある表情で微笑ませた。（またぼんやりしていらっしやる）——娘むすめした着物を着ている。それが産み日に近い彼女には裾がはだけ勝ちなくらいだ。

「今日はひよっとしたら大槻おおつきの下宿へ寄るかもしれな

い。家捜しが手間どつたら寄らずに帰る」切り取った回数券は直じかに細君の手へ渡してやりながら、彼はむつかしい顔でそう云った。

「此処だった」と彼は思った。灌木や竹藪たけやぶの根が生なかなました赤土から切口を覗のぞかせている例の切通し坂だった。

——彼が其処へ来かかると、赤土から女の太腿ふとももが出ていた。何本も何本もだった。

「何だろう」

「それは××が南洋から持って帰って、庭へ植えている○○の木の根だ」

そう云ったのは何時の間^{いつ}にやって来たのか友人の大槻の声だった。彼は納得がいったような気がした。と同時に切通しの上は××の屋敷だったと思った。

小^{しばうく}時歩いていると今度は田舎道だった。邸宅などの気配はなかった。やはり切り崩された赤土のなかからよきによき女の腿が生えていた。

「○○の木などある筈がない。何なんだろう？」

何時か友人は傍にいらなくなっていた。——

行一は其処に立ち、今朝の夢がまだ生なましているのを感じた。若い女の腿だった。それが植物という概念と

結びついて、畸形きけいな、変に不気味な印象を強めていた。鬚根しゅこんがぼろぼろした土をつけて下がっている、壊くえた赤土のなかから大きな霜柱が光っていた。

××というのは、思い出せなかったが、霸氣はきに富んだ開墾家で知られている或る宗門そうりよの僧侶——そんな見当だった。また〇〇の木というのは、氣根を出す榕樹たこのきに聯想れんそうを持っていた。それにしてもどうしてあんな夢を見たんだろう。然し催情的な感じはなかった。と行一は思った。

実験を早く切り上げて午後行一は貸家を捜した。こんなことも、氣質の明るい彼には心の鬱ふさしたこの頃でも割

合平気なのであった。家を捜すのにほっとすると、実験装置の器具を注文に本郷へ出、大槻の下宿へ寄った。中学校も高等学校も大学も一緒だったが、その友人は文科にいた。携わっている方面も異い、ちが氣質も異っていたが、彼等は昔から親しく往来し互の生活に干渉し合っていた。殊に大槻は作家を志望していて、ぼうよう茫洋とした研究に乗り出した行一になにか共通した刺激を感しげじるのだった。

「どうだい、で、研究所の方は？」

「まあぼちぼちだ」

「落ちついているね」

「例のところ未だ引っ掛かってるんだ。今度の学会で先生が報告する筈だったんだが、今のままじゃ未だ貧弱でね」

四方山よもやまの話が出た。行一は今朝の夢の話をした。

「その章魚たこの木だとか、××が南洋から移植したと云うのは面白いね」

「そう教えたのが君なんだからね。……如何にも君らしいね。出鱈目でたらめをよく教える……」

「なんだ、なんだ」

「狐の剃刀とか雀の鉄砲とか、いい加減なことをよく云うぜ」

「なんだ、その植物なら本当にあるんだよ」

「顔が赤いよ」

「不愉快だよ。夢の事実で現実の人間を云々するうんぬんのは。そいじゃね。君の夢を一つ出してやる」

「開き直ったね」

「だいぶん前の話だよ。Oがいたし、Cも入ってるんだ。それに君と僕と。組んでトランプをやっていたんだから、四人だった。何処でやっているのかと云うと、そ

れが君の家の庭なんだ。それでいざやろうという段になると、君が物置みたいな所から、切符売場のようになってた小さい小舎こやを引張り出して来るんだ。そしてその中へ入って、据り込んで、切符を売る窓口から『さあここへ出せ』って云うんだ。滑稽な話だけど、何だかその窓口へ立つのが癩しやくで憤慨していると、Oがまたその中へ入ってもう一つの窓口を占領してしまった。……どうだその夢は」

「それからどうするんだ」

「如何にも君らしいね……いや、Oに占領しられるとこ

ろは君らしいよ」

大槻は行一を送って本郷通へ出た。美しい夕焼雲が空を流れていた。日を失った街上には早や夕暗ゆうやみが迫っていた。そんななかで人びとはなにか活気づけられて見えた。歩きながら大槻は社会主義の運動やそれに携わっている若い人達のことを行一に話した。

「もう美しい夕焼も秋まで見えなくなるな。よく見とかなくちや。——僕はこの頃今時分になると情けなくなるんだ。空が奇麗だろう。それにこっちの気持が弾はずまないと来ている」

「呑気のんきなことを言ってるな。さようなら」

行一は毛糸の首巻に顎あごを埋めて大槻に別れた。

電車の窓からは美しい木洩れこもれ陽びが見えた。夕焼雲がだ

んだん死灰に変わっていった。夜、帰りの遅れた馬力ばりきが、

紙で囲った蠟燭ろうそくの火を花束のように持って歩いた。行一

は電車のなかで、先刻大槻に聞いた社会主義の話の思い出していた。彼は受身になった。魔誤ついた。自分の治めてゆこうとする家が、大槻の夢に出て来た切符売場のよう
に思えた。社会の下積という言葉を聞くと、赤土のなかから生えていた女の腿を思い出した。放胆な大槻は、

妻を持ち子を持つとうとしている、行一の気持に察しがなかつた。行一はたじろいだ。

満員の電車から終点へ下された人びとは皆働人の装いで、労働者が多かつた。夕刊売りや鯉こい売りが暗い火を点ともしている省線の陸橋を通り、反射燈の強い光のなかを黙々と坂を下りてゆく。どの肩もどの肩もがっしり何かを背負っているようだ。行一はいつもそう思う。坂を下りるにつれて星が雑木林の蔭へ隠れてゆく。

道で、彼はやはり帰りの姑しゅうとめに偶然追いついた。声をかける前に、少時しばらく行一は姑を客観しながら歩いた。家

人を往来で眺める珍しい心で。

「なんてしょんぼりしているんだろう」

肩の表情は痛いたしかった。

「お帰り」

「あ。お帰り」姑はなにか呆ほうけているような貌かおだった。

「疲れてますね。どうでした。見つかりましたか」

「気の進まない家ばかりでした。あなたの方は……」

まあ帰ってからゆっくりと思つて、今日見つけた家の少し混み入った条件を行一が話し躡ためらっていると、姑はおっ被せるように

「今日は珍しいものを見ましたよ」

それは街の上で牛が仔こを産んだ話だった。その牛は荷車を牽ひく運送屋の牛であつた。荷物を配達先へ届けると同時に産気づいて、運送屋や家の人が気を揉もむうちに、安やすと仔牛は産まれた。親牛は長いこと、夕方まで休息していた。が、姑がそれを見た頃には、蓆むしろを敷き、その上に仔牛を載せた荷車に、もう親牛はついていた。

行一は今日の美しかった夕焼雲を思い浮かべた！

「ぐるりに人が沢山集まって見ていましたよ。提ちようちん灯を借りて男が出て来ましてね。さ、どいてくれよと云って、

前の人をどかせて牛を歩かせたんです——みんな見てま
した……」

姑の貌は強い感動を抑えていた。行一は

「よしよし、よしよし」膨らんで来る胸をそんな思いで
緊めつけた。

「そいじや、先へ帰ります」

買物があるという姑を八百屋の店に残して、彼は暗い
星の冴えた小路へ急ぎ足で入った。

——一九二六年五月——

日本文学電子図書館

檸檬

著者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

昭和44年8月20日 4刷



日本文学電子図書館